

「慰霊の日を後に～忘れていけないこと～」

令和5年7月3日

先生方は6月23日（金）の慰霊の日をどのように過ごしたでしょうか？私は、初めて糸数「アブチラガマ」の慰霊祭に参加し、その後、日比野裕子さん、中村桂子さんを交えた「アブチラガマ」ガイドボランティアとの交流会に参加しました。日比野裕子さん、中村桂子さんとは、沖縄戦において宜野湾嘉数の激戦で



負傷した後、軍の撤退とともに糸数「アブチラガマ」に収容され生き残った故日比野勝廣さんの娘達です。日比野さんは、戦後100回以上、戦った嘉数や命を助けてもらった糸数「アブチラガマ」を訪れ亡くなった戦友を慰霊していたのです。人形職人であった日比野さん、沖縄ではひな人形を飾る風習がないと知り、1980年2月に当時、玉城・百名・船越幼稚園の三園にひな人形を寄贈しました。私毎で恐縮ですが、前任校の百名小にいた時、この話を地域の方々から聞かされました。百名小学校にひな人形があることを職員は知っていましたが、その経緯を知る職員はいませんでした。日比野さんが戦争を惜み平和への願いを込めて贈ったひな人形のことを忘れ去られていたのです。その経緯を知ってから百名小では慰霊の日に向けて「6月のひな人形」「慰霊のひな人形」として飾り、今年も飾ってくれました。元小学校の先生であった桂子さんは、愛知県で「ピース愛知」という戦争の語り部として平和の取組を行い、父日比野勝廣さんが体験した沖縄戦を語りつぐ活動を行っています。

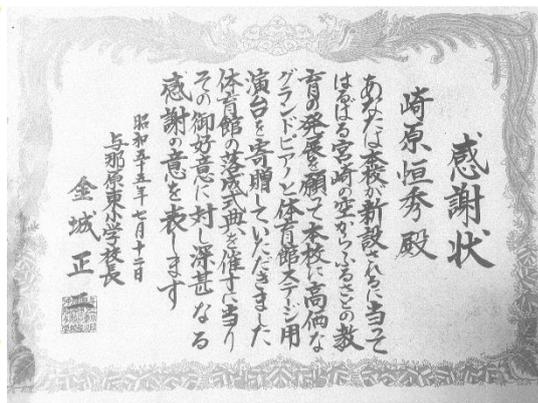


読売新聞社提供



さて、我が与那原東小学校においても決して忘れてはいけないことがあります。慰霊の日を前にした22日（木）宮崎県在住の常盤泰代さんが6年生のために「平和講話」を行いました。常盤さんも元小学校の先生です。宮崎市立宮崎東小学校に赴任した時、校区にある「波島」地区の存在を知りました。「波島」は、沖縄戦を前に疎開してきた沖縄県人が住み着き宮崎の「沖縄県人会150人程度のうち、波島地区に70世帯が今も暮らしている」そうです。（宮崎日日新聞社『らびあ』（2022年）より）

「波島」に住む沖縄県人の方々には戦後の苦しい生活を乗り越え、宮崎の地に根をおろし、沖縄を伝え続け、琉球漆器に発祥を持つ「宮崎漆器」は高級品として、また、琉球の織物に由来する織物も高級品として知れ渡っているそうです。面白いところでは、沖縄名物の「サーターアンダギー」も宮崎の人の口にあうように試行錯誤して作り上げ地域に馴染んだお菓子として広く認知されているそうです。



ところで、宮崎の地で活躍している人に、板良敷出身の崎原恒夫さんという方がいたそうです。この方は、与東小が新設されることを聞き、昭和55年にグランドピアノと体育館用ステージ演台を寄贈しています。遠く故郷を離れても故郷を思う深い思いが伝わってきます。

先生方、78年前に起きた沖縄戦の悲惨さと平和の大切さを教えることはもちろん、先人が歩んだ戦後の苦しみと苦勞を子ども達に伝え、与那原と宮崎との繋がりを語り続けなければなりません。忘れてはいけない歴史があるのです。